

『根付く』

台本師 SFC運営 yΦu

※一人称、方言改変あり。多少の言い回し変更あり。

○この地方は古くから神様にまつわる言い伝えがある……

毎年、ある年齢を迎える子供は、神様に娶られるという話だ……

その風習は私が産まれてくる前、それこそ私の祖父、曾祖父更にその曾祖父の代まで遡ることになるらしいんだけど。

○何にせよ、その祭りの主役に選ばれた子は、一生困ることなく幸せに暮らせるらしく、どこの子供も選ばれる様に良い子で過ごしている村らしい。

今回は、その村の取材に来た訳だが、確かに、この村の子供たちは、礼儀正しく、余所者である私にも、優しく接してくれる。

それだけでなく、村の人皆が、優しく接してくれる。

せっかく来てくれたんだから祭りの日まで居ないかと、わざわざ寝食まで提供してくれる徹底ぶりだ。

○祭りまで、残り1週間らしく、何か手伝えることは無いかと。

村の人達に聞くのだが、お客に手伝ってもらうなんて出来ない。最後まで楽しんでくれたらいい、と本当に何もせず至れり尽くせりの生活をしている。

○祭りまで、残り三日となった。

村の人達は、慌ただしく準備をするようになった。

○私は、と言うと相も変わらず特にすることもなく、取材をして、暇があれば村の子供たちと遊んでいる。

子供たちも、祭りの日まで、ちゃんと居てね。楽しみだねっ、と楽しそうに一緒に過ごしてくれる。

○この村の住人たちは本当に子供も大人も優しくくて親切な人しか居ない。この村に取材に来れたことを幸せに思う。

○祭り当日がついに来た。

なぜかは分からないが、この日は朝からとても豪華な食事を用意してくれていた。

流石に食べきれないほどのご馳走だったので驚きを隠せなかった。

食べ終わり、ゆっくりしていたらとてつもない睡魔に襲われた。

もう一眠りしてから祭りの取材をする事にしよう。

○よく寝たなあ……と思って身体を動かそうとするが動けない……

おかしい……目を開いているのに真っ暗なままだ……手と足も縛られている……

ここに来て私は気付いた。なぜ村人達は祭りの日まで私をもてなしたのかを、子供達が毎日遊びに来ていたのかを、私と過ごす祭りを、楽しみにしていたかを……

○そう……

余所者を生贄にすれば子供は減らない……友達は欠けることがないのだと……

私の腹に何かが刺さった音がした……

身体を温かな液体がつつたっていく

○「そうか、そういう事だったか……」

そのまま私の意識は深く暗い所へと消えていった……

そして私は、この地に根付くことになった。人柱として……